

氏名	岩田 成就
学位の種類	博士(神学)
報告番号	乙第348号
学位授与年月日	2019年9月19日
学位授与の要件	学位規則(昭和28年4月1日 文部省令第9号) 第4条第2項該当
学位論文題目	ブルトマンとリクールの聖書解釈学——キリスト教信仰の受け 取り直しへ向けて
審査委員	(主査) 廣石 望 (立教大学大学院キリスト教学研究科教授) 久保田 浩 (明治学院大学国際学部教授) 佐藤 啓介 (南山大学人文学部キリスト教学科准教授)

# I. 論文の内容の要旨

## (1) 論文の構成

### 凡例

### 序論

- 1 ヘーゲルの「宗教哲学」
- 2 トレルチと「素朴な状態への復帰」
- 3 弁証法神学と「事柄そのもの」への復帰
- 4 リクール解釈学と「第二の素朴さ」
- 5 課題と構成

### 第1章 ブルトマンと史的イエスの問題

- 1- 1 ブルトマンにおける史的イエス探求の放棄
  - 1-1-1 歴史神学の時代
  - 1-1-2 弁証法神学の時代
  - 1-1-3 解釈学の時代
- 1- 2 史的イエスの「新しい探求」の可能性とブルトマン後の可能性
  - 1-2-1 史的イエスの「新しい探求」
  - 1-2-2 ブルトマンの答え
  - 1-2-3 ブルトマンの神学的根拠の再検討
  - 1-2-4 ブルトマン後の二つの方向の可能性

### 第2章 ブルトマンと非神話論化の問題

- 2- 1 非神話論化の諸層
  - 2-1-1 批判としての非神話論化
  - 2-1-2 解釈としての非神話論化
  - 2-1-3 宣教としての非神話論化
- 2- 2 非神話論化への問い
  - 2-2-1 救済の出来事の現実性
  - 2-2-2 歴史の理解
  - 2-2-3 象徴言語の不可避性

### 第3章 リクール解釈学における宗教的象徴の受け取り直し

- 3- 1 非神話論化とリクールの象徴の解釈学

- 3-1-1 リクール解釈学の展開
- 3-1-2 非神話論化へのリクールの評価と批判
- 3-2 宗教的象徴の受け取り直し
  - 3-2-1 宗教的象徴の理論
  - 3-2-2 悪の象徴論
  - 3-2-3 救済の象徴論
- 3-3 宗教的象徴の批判
  - 3-3-1 宗教的象徴と偶像崇拜
  - 3-3-2 宗教批判と信仰
  - 3-3-3 顕現と宣教の弁証法

#### 第4章 リクール解釈学における聖書物語の受け取り直し

- 4-1 テキスト解釈学と「疎隔」の神学的意義
  - (a) 出来事からの意味の疎隔
  - (b) 著者からのテキストの疎隔
  - (c) 日常世界からのテキスト世界の疎隔
  - (d) 前テキスト的自己からのテキスト的自己の疎隔
- 4-2 隠喩としての宗教言述
  - 4-2-1 革新の言語としての隠喩
    - (a) 命題と語り
    - (b) 制度としての言語
    - (c) 隠喩の理論
    - (d) 言述の多声性と相互作用
  - 4-2-2 福音書物語における隠喩過程
  - 4-3-3 歴史とフィクションの交叉
  - 4-3-4 「宣教」と「物語」

#### 第5章 リクール解釈学と物語の神学

- 5-1 文字通りの意味への問い
  - 5-1-1 フライによる「前批評的読み」の復権
  - 5-1-2 リンドベックの「文化・言語的」アプローチ
  - 5-1-3 ポストリベラル神学の問題点
- 5-2 キリスト教の独自性への問い
  - 5-2-1 宗教言語の特殊性と「限界」の概念
  - 5-2-2 キリスト教の実定性と「証言」の解釈学
- 5-3 聖書の正典性への問い
  - 5-3-1 聖典概念の規定

5-3-2 解釈学からのアプローチ

5-3-3 文化・言語的アプローチ

結論

参考文献

## (2) 論文の内容要旨

本論文は、新約学者 R・ブルトマンが提唱した「非神話論化」のテーゼをめぐる諸問題と、これを受けて哲学者 P・リクールによって主に 1960-80 年代に展開された多岐に亘る議論を、聖書解釈学の地平で「キリスト教信仰の受け取り直し」という視点から論じる。

序論は、ブルトマンが「非神話論化」を提唱した背景にドイツの宗教哲学と宗教史学、そして弁証法神学のあることが解説され、彼の限界を超える視野を開くものとしてリクールの聖書解釈学をとりあげて論じるという意図と、論文全体の構成が説明される。

第1章は、ブルトマンにおける「史的イエスの問題」をとりあげる。ブルトマンは、イエスの十字架を神の終末論的行為として告知するという原始教会の宣教にキリスト教信仰の核心を見て、史的イエスへの問いを退けた。他方で、ブルトマンの弟子たちを中心に開始された史的イエスの「新しい探求」において、原始キリスト教の宣教内容と史的イエスの関連づけこそが新たに問い直されたことが詳細に紹介される。

第2章は、ブルトマンにおける「非神話論化の問題」をとりあげる。非神話論化は、もはや共有不可能となった古代の神話論的な世界像を排した上で、キリスト教信仰を実存論的に再解釈することであり、そこには批判のみならず、解釈と宣教の諸層があることが指摘される。他方、この綱領の提示は多様な議論を引き起こした。その中から、救済の現実と信仰の関係、歴史と救済(史)の関係、象徴言語の不可避性をめぐる論争が解説される。

第3章は、ブルトマン神学の不足を補い、また限界を乗り越えるものとして、リクール解釈学における「宗教的象徴の受け取り直し」を扱う。1960年代のリクールは、神話論的言説の象徴性に着目した。宗教的象徴には、安易な実存論的抽象化を阻む特徴があり、悪の象徴が告白、神話、教義を通して保持される一方で、救済の象徴もまた人間の有限性を超える無限性の位相によって保たれる。そのさい近代宗教批判に照らして、象徴の偶像化は退けられるべきだが、それでも宣教には象徴が担う顕現機能が残ると論じられる。

第4章は、リクール解釈学における「聖書物語の受け取り直し」を扱う。言語論的転回を経た 1970年代以降のリクールは、了解が成立するに先立つ長い迂回路を設定する。それは出来事から意味が、著者からテキストが、日常世界からテキスト世界が、そして前テキスト的自己からテキスト的自己が、そのつど「疎隔」化されるプロセスである。また彼は言語現象としての「隠喩」の本質を、意味論的革新による現実の再記述に見出す。そして福音書の「物語」をそうした隠喩過程と捉える一方で、そこに「告知」「論争」「受難」の契機を介して史的イエスとのつながりが保持されていると見ていることが指摘される。

第5章は、ポスト・リベラル神学を代表する新イェール学派の「物語神学」(H・フライ、G・リンドベック)がリクール解釈学と比較され、またリクールが「限界」概念によって宗教言語を詩的言語一般から区別し、さらに「証言」概念によってキリスト教的啓示を詩的開示一般から区別することが指摘され、最後に再び「正典」概念を巡って解釈学的アプローチが新イェール学派と比較される。

最終章である結論は全体のまとめであり、今後の展望が示される。

## Ⅱ. 論文審査の結果の要旨

### (1) 論文の特徴

近代宗教批判を含む啓蒙主義と歴史主義は、伝統的なキリスト教信仰に再定義を迫るものであった。このことは聖書解釈の点では、聖書で前提された古代の神話論的な世界像を、信仰の名によって強要することが最早できないことを意味した。R・ブルトマンが提唱した「非神話論化」は、近代的な批判精神にちよつと、キリスト教信仰を「受け取り直し」た上で再提示することを目指した。ブルトマンの聖書解釈は肯定的には「実存論的解釈」と定義され、人間論に焦点を合わせる。すなわち、キリストを介してなされる神の呼びかけに信仰の決断をもって応答する人格関係に、それは収斂された。このような事柄 (Sache) への集中は、しかし、聖書のさまざまな物語的要素や象徴的要素を、神話論的な残滓として排除する結果をもたらしたことが知られる。これに対して本論文は、ブルトマンの問題提起の正当性を認めつつも、主としてP・リクールの解釈学を手がかりに、批判を経由した後のキリスト教信仰の「第二の素朴さ」を擁護する道を探る。

本研究の最大の独自性は、20世紀プロテスタント聖書解釈学を代表する二人の巨人であるブルトマンとリクールの思索の内的関連を、多様な議論を通して精緻に明らかにした点にある。ブルトマンに関しては、日本におけるブルトマン受容にも周到な目配りがなされ、リクールを論じるに際しても、彼が対話相手とした諸学、例えば精神分析学や構造主義、また神話学や言語理論などが必要に応じて紹介され、何よりもリクールがブルトマンの問題提起をどう受け止め、どのような回路を経て、後者の実存論的解釈における人間論的集中がもたらす抽象性を超えていったかが丹念に示される。その多様な回路の二つの焦点が、一方における宗教にとっての象徴の不可避性、そして他方における聖書言語における隠喩性と物語性の結合であると著者は論じる。

### (2) 論文の評価

本論文は、大量の一次資料を丹念に読み解き、リクールの聖書解釈学がどのような意味でブルトマン神学を継承し、またそれを批判的に乗り越えるものであるかを、重要な概念を手がかりに辿った力作である。実際にはブルトマンの聖書解釈をリクールを通して「受け取り直す」プロセスともなっており、その導線上に、ブルトマンの問題提起を著者自身が新しい視点から問い直し、また答えてゆくことにつながってゆくことが期待される。その際には、一方ではリクール自身がかつての自説を後に自ら修正している事例にも着目し、また他方ではリクール解釈学に関する先行研究とのさらなる対話を通して、リクールに対する批判的な眼差しを獲得することで、「受け取り直し」や「素朴さ」について著者独自の思索を展開することになるであろう。